

令和7年2月

如

あ お ぞ ら

月

第408号

鹿屋市青少年育成センター

鹿屋市 共栄町 20-1 TEL 31-1138
(鹿屋市教育委員会 生涯学習課)

「おかあさん、おかあさん」

鹿屋市立田崎中学校 校長 竹崎 賢一

昭和41年、今から58年前の話。愛知県にあった私立中京商業高校（現中京大中京高校）が、甲子園で春夏連覇を達成した。達成したなんて言うと、まるで自分が、同時代に、その偉業に立ち会っていたかのような感じであるが、わたしはその頃は1歳の赤ん坊、もちろん直接見たわけではない。小学校の図書館にあった「甲子園物語」という本にそう書いてあった。

今とは違って投球数制限もなかった時代の話だから、中京商業高校のエース加藤投手は、春の選抜大会も、夏の選手権大会も、一人で投げ抜き、強豪ひしめく甲子園で、見事連覇を成し遂げたのだそうだ。

優勝の興奮、歓喜、そしてヒーロー加藤投手の優勝インタビュー。誇らしげに、これまでの練習の苦しさや、連覇のプレッシャーが語られるのかと思いきや、加藤投手は、ただただ「おかあさん、おかあさん」と言って泣きじゃくったのだそう。インタビュアーから何を言われても問われても、ただただ「おかあさん、おかあさん」それしか言えなかったのだそう。

親子の間にどんなストーリーがあったのか、それはわからない。でも、長い間、親子で一緒になって、喜びも苦しみも分け合ってきたんだろうなあ、そう思った。加藤投手は、おかあさんに、なんて言いたかったのだろう。ありがとうも言葉にならないほど、感極まっていたんだなあ。おかあさんは、どんな思いでそのインタビューを聞いたのだろう。きっとうれしかったんだろうなあ、幸せだったんだろうなあ。きっと我が子のことが、誇らしくて

たまらなかっただろう。なんて強い親子の絆なんだろう子ども心にそう思い、深く感動したのを覚えている。

やがて、わたしも二人の子どもの親になった。子育てについて目標を立てていたわけではないが、漠然と、その「おかあさん」と加藤投手のような絆で結ばれた家族になれたらいいなあという思いはあった。甲子園で優勝するとか、そんな偉業じゃなくていいから、子どもが成長していく道のりのどこかで、親の愛を実感して感謝してくれる場面があったら、もう、それだけで十分なんだけどもなあ。

学校で、保護者に対して子育てを語る機会があるときには決まってこの話をする。保護者のみなさんは、まさに今、子育て真っ最中。苦労していない家庭なんてどこにもない。だけどいつか、その苦労が笑い話にかわる、子どもが変えてくれる、宝物にしてくれる。そう信じて今日も明日も一緒にがんばりましょう。今を頑張って乗り越えましょう、と。

